
私のファンタジア

さい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私のファンタジア

【Nコード】

N1013U

【作者名】

さい

【あらすじ】

あ、死んだわ。そう思ったら転生してました。そこは地球の並行別世界で、剣と魔法のファンタジーワールドだったりした。注意..不定期更新です。仕様上登場人物に美形が多いです。主人公がメタ発言や行動をします。主人公は最強じゃありません。恋愛要素が一円玉の重さくらいあります。逆ハー要素がちよこつとあります。

開幕挨拶（前書き）

不定期更新＆毎話文字数がかなり違います。

誤字脱字、アドバイス等があればコメントいただけると助かります。

開幕挨拶

私が生まれ変わってから五年の月日が過ぎた。

…突然お前は何を言い出すんだって思ったことだろう。
私だって君たちの立場なら思うだろうしな。
だが事実、私は読んで字のごとく生まれ変わったのだ。

前世は地球に住む日本人の大学生。今は異世界の奇妙な村で暮らす五歳児。

死んだと思えば次の瞬間にはあーあー煩い赤ん坊になってたわけだ。

周りのものを認識したときに、角やら羽やら尻尾やらが生えている人型生物がいたり、ありえないカラーの髪や瞳の人間とか動植物がいたことには度肝を抜かれたね。

まあ一番初めに見た母親が銀髪碧眼の西洋風な見た目だったのが最初の衝撃。

次に父親がなぜか日本人みたいに黒髪黒眼、童顔なことにも別の意味でショックを受けたものだが。

とにかく、私はファンタジーな世界に前世の記憶を持って転生したらしい。

因みに両親には言葉を話せるようになってすぐにその事は伝えてある。

気味悪く思われると思ったが、ありがたい事に二人は特に気にした様子もなく、寧ろ面白がっているようだ。

さて、何故私がいきなり画面の向こうの第三者、つまり君たちに話しかけるというメタな行動をしているかというのだ。

これから私を主人公とした物語が始まるので一応舞台挨拶のようなものをしようと思ってね。

遅れ馳せながら自己紹介をしよう。

私はリースレット。

性はない。

ただのリースレットだ。

これからこの物語には説明描写という名の私から君たちに話し掛ける機会が幾度もあるだろう。

その時は声に出して私に返事、時に君たちから声を掛けてくれても全く構わない。

それにきちんと応えられるかはわからないが。

何分距離が遠いものだからな。

それと：今私は少々堅苦しい、五歳児におおよそ似合わない言葉をつかっているが普段からずっとこうなワケじゃあない。

普段はもっと砕けたフランクなものだし、たまに関西弁がポロリするかもしれないし、2ちゃんねる用語も出るかもしれないし、雑草も生えることだろう。

だが説明描写の時くらい、私的にはこんな風な演劇の語り手のように喋りたいと思うわけだ。

：あまり前口上が長くてもつまらないな。

そろそろ本編に入るとしよう。

君たちが少しでもこの物語を読んで楽しんでくれると私も嬉しい。

1..私の日常を紹介します。

私の一日は朝、隣の家の幼馴染が起こしに来ることではじまる。

「リース！お早う、朝だよー！起きて、起きてよ！」

ばふうっ、と音をたてて私のベッドに飛び掛かる幼馴染。

もうそこそこ大きな体になった子どもからの飛び掛かり攻撃はなかなかダメージが大きい。

従兄や兄弟、幼馴染がいる人は体験したことがあるウェット感覚じゃないかな。

「うぐ、くる…し…息が、」

それでたまに鳩尾の衝撃だけじゃなくて喉元にチョップが入ったり、鼻口塞がれて呼吸困難になったり。

「リース！早く起きてよ！」

「おえっ…どけ、このバカチン…」

思わず本音が出たけど仕方ないと思うんだ。

安眠をデンジャラスな手段で妨げられたら悪態の一つや二つ、三つや四つなんて余裕のよっちゃんでしょう。

足にありったけの力を込めて襲撃者を蹴り飛ばす。

なんか悲鳴が聞こえた気がしたけど無視に限る。

第一ダメージなんて全く感じてないんだろうし。

「ああー、呼吸困難で死ぬかと思った。グー、朝から人様に奇襲ダイブなんて掛けたらあきませんよって何回言えばわかるのかな？」

部屋の隅で三角座りをしているグー、ことグレモルトを睨む。

グレモルトはやや爬虫類っぽい感じの亜人の少年で、村長の家で暮らすみなしごグーちゃんだ。

身体的特徴からして竜神族じゃないかって思われてる。

「ううー、蹴飛ばすなんて酷いよりース。そんな思いつきりしなくでもいいじゃないかあ」

「煩い、男がピーピー抜かすな。：はい、着替えるから出てってねー」

しっし、と部屋の外にグレモルトを追いやって寝巻を脱ぐ。

まあ別にこんなおこちゃまボディー見られたところで恥もくそもないんですけどね。

しかし眩しい、太陽の位置的にまだ朝の七時くらいか。

子どもは朝早くから元気だねえ。

…この世界はどうやら地球のパラレルワールドらしい。

詳しくはわからないが、この『地球』には魔素とかいう酸素やら二酸化炭素、窒素みたいな元素が存在する。

魔法が使えたりモンスターがいたり亜人がいたり、説明し難いことは全て魔素を理由にすれば片付く。

何故魔素なるものがこの『地球』に存在するのかは知らないが。

まあご都合主義の便利ワードだと思ってくれ。

とにかく、ここは別の『地球』で、魔素というファンタジー要素がもたらす効果以外はほぼ地球と同じだ。

だから此処、この星は太陽系惑星で、一日一回、一年で三百六十五回まわる。

時間概念が一緒なのはかなり助かる話だ。

おかげで今が七時くらいだって特定できるわけだし。

「リースー、まだー？おばさんが朝ごはんできたってー！」

「すぐ行く！」

全く、住む世界が違ってても日常の、特に朝の風景はどこも似たようなものなんだな。

「おはようリースレット」

「おはよ、母さん」

自室から出ればすぐに居間。

巨木の輪切りのようなワイルドな木製テーブルには既にモーニングが並んでいる。

グレモルトも当然のように席についているが何時もの風景なので気にしない。

「あ、言ってなかった。グー、おはよ」

「うん！おはようリース！」

につっこにこ笑顔のグレモルトの両手にはナイフフォークが装備済みだ。

そんな幼馴染に呆れ顔の私。

私の向え側では母さんがゆるりと微笑んでいた。



「え、じゃあおじさん暫く帰ってこないの？」

「まあね。でもすぐ帰ってくるみたいだし」

お子さまの仕事は遊ぶこと！

大学生だった私的に泥だらけになりながら走り回るのは微妙な気分だけど。

私の村じゃインドア派だと生きていけないから遊びという名のサバイバル演習と思えばオッケー。

朝食の後、村の裏手にある湖に小舟で乗り出す。

今日の午前演習は湖の魚（シーラカンスもどきの巨大怪魚）を素潜りでハント。

身体中にあるトゲが曲者で、グレモルトをうまく盾にしないと私がリアル針のムシロになる。

「そういえば母さんが言ってたんだけどさ、最近森の主の気がたつてるらしいよ」

「森の主の？…大丈夫かなあ」

「大丈夫じゃないでしょ。何が理由かは知らないけど、取りあえず君主危うきに近寄らず、だ」

「よくわからないけど森には行かないほうがいいんだね」

他愛もない話をしつつ、小舟を漕ぎ続ける。

湖の中心まで四分の一くらいの距離まで漕ぎ、櫂を止める。

「いよっし！気合入れて捕るぞー！」

まずはグレモルトが潜り、怪魚に『餌』と認識させて船の二メートル圏内まで誘導する。

グレモルトは体が異常に丈夫でタフだからちよっとくらい咬まれても刺されても切られても食われても問題ない。

水上にいる私でも肉眼で認識できるくらい近寄れば、次は私の出番。

「グー！」

呼びかけにあわせてグレモルトが怪魚の水上に押し出す。

くの字に折れ曲がって空中に放り出された怪魚に向かって魔法で出来た突風と氷柱をお見舞いしてやる。

「ホームランっ！いやっほう！」

凄まじい勢いで陸地目掛けて飛んでいく怪魚に手を振り、グレモルトを舟に引き上げた。

素晴らしい連帯プレー。

グレモルトの拳に治癒魔法ヒーリングを掛けてから風魔法で水気を一気に飛ばしてやる。

別に治癒なんてかけなくても薄皮一枚捲れてないだろうけど一応。水中にいるのに水上の声が聞こえる超聴力、水圧を丸無視した怪力

ボディブロー。

怪魚の全長は約三メートル弱、体重およそ百五十キロ、鱗はダイアモンド級の硬いトゲ付き。

グレモルトの身長は約百四十センチ、体重は：知らん、因みに十歳まんまの意味でひとでなし、さすが竜神族（仮）。

この世界の人間の名誉の為に言わせてくれ。

ふつうの成人男性は民族によるけど百貫デブをグーパン一発で宙に浮かせたりは出来ない。

グレモルトが超ハイスペックなだけだ。

「どうしたの、リース」

「なんでもない。ただ人間の基本性能について読者諸君に説明していただけた」

「：変なの。ね、早く戻ろうよ！」

行きは權じゃないと怪魚を誘き寄せられないけど帰りはラクチン。風魔法と水魔法を操作しながらすいーっと戻る。

先ほどから普通に私が魔法を使っているのをご存知だろうか。これぞファンタジーの醍醐味だと思う。

剣と魔法、亜人や魔物はこのジャンルの必須。

その点ではこの世界は王道、テンプレ異世界というべきだろうか。私はまだ見たことがないが、ギルドや魔法学校もあるという。

今の私の父親はリアルモ〇ハン生活だし、母親も昔は大国の上位騎士だったとか。

大事なことなのでもう一度言う、まさにファンタジー。

蛇足だが、私は今鼻をほじるかの如く簡単に魔法を使っているが実際はなかなか大変なことだったりする。

方法はかなりややこしいので割愛するが、とにかく私も楽に使えるようになるまで苦労した。

その苦労話はまたの機会にするとして、取りあえず私の今のレベルを聞いてくれ。

王道風にいえば賢者クラス、RPG風味にいえばウィザード六十レベルくらい。

賢者といえば人間の中ではトップクラス。

六十レベルなら表向きのラスボスに勝てるレベルかな。まあ隠しボスとか裏ボスには瞬殺されるけど。

けど私はまだびっちびち過ぎるくらいピチピチの五歳児。

このまま頑張ればきっと裏ボスだって倒せるようになるだろう。

…なれるといいなあ。

おっとすまない、つい私の近況を語ってしまった。

「ねえ、今日は何作るの？」

「んー、怪魚とハーブのごちゃ混ぜスープとか」

ザ、漢の料理って感じだね。

美しさのカケラもないネーミングレシピ。

この村は立地的に結構危険な場所なので、もしもの為に自給自足や自炊等の訓練をしておく必要がある。

なので村の子どもたちは朝晩は保護者の元で食べるとしても昼は何か理由がない限り材料から調理具まで全て自分で用意して作らなければならぬ。

といっても村に子どもなんて私とグレモルト、あともう一人くらいしかいないんだけど。

もう一人の幼馴染は特殊な体質なので、実質こんな毎日がサバイバルなのは私とグレモルトだけだ。

「ハーブって…森に入ったらダメって言ってなかった？」

「あ、そうだった。まあ奥地まで入らずぱっと葉っぱを採って出れば大丈夫っしょ」

「リース…。言い出したのはリースなのに、僕知らないからね」

聞こえんなあー。

第一魚だけのスープとか味気なくて食べれる気しないでしょうが。料理ってのは人生と一緒にスパイスを振りかけなきゃ味気なくてダメだね。

とか言ってみる。

「まあグーが来ないなら私は別に構わないよ？ 一人でも行くから」

言いながら怪魚を木陰まで移動させ、氷漬けにして放置する。

戻ってきたら他の魔獣に味見されたり横取りされたりするのは勘弁だし。

「…バカ。僕も行くよ!」

「え、今バカとか聞こえたんだけど。気のせいかなあ」

「気のせいだよ。じゃあ早く行って早く戻ろう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1013u/>

私のファンタジア

2011年10月8日05時06分発行